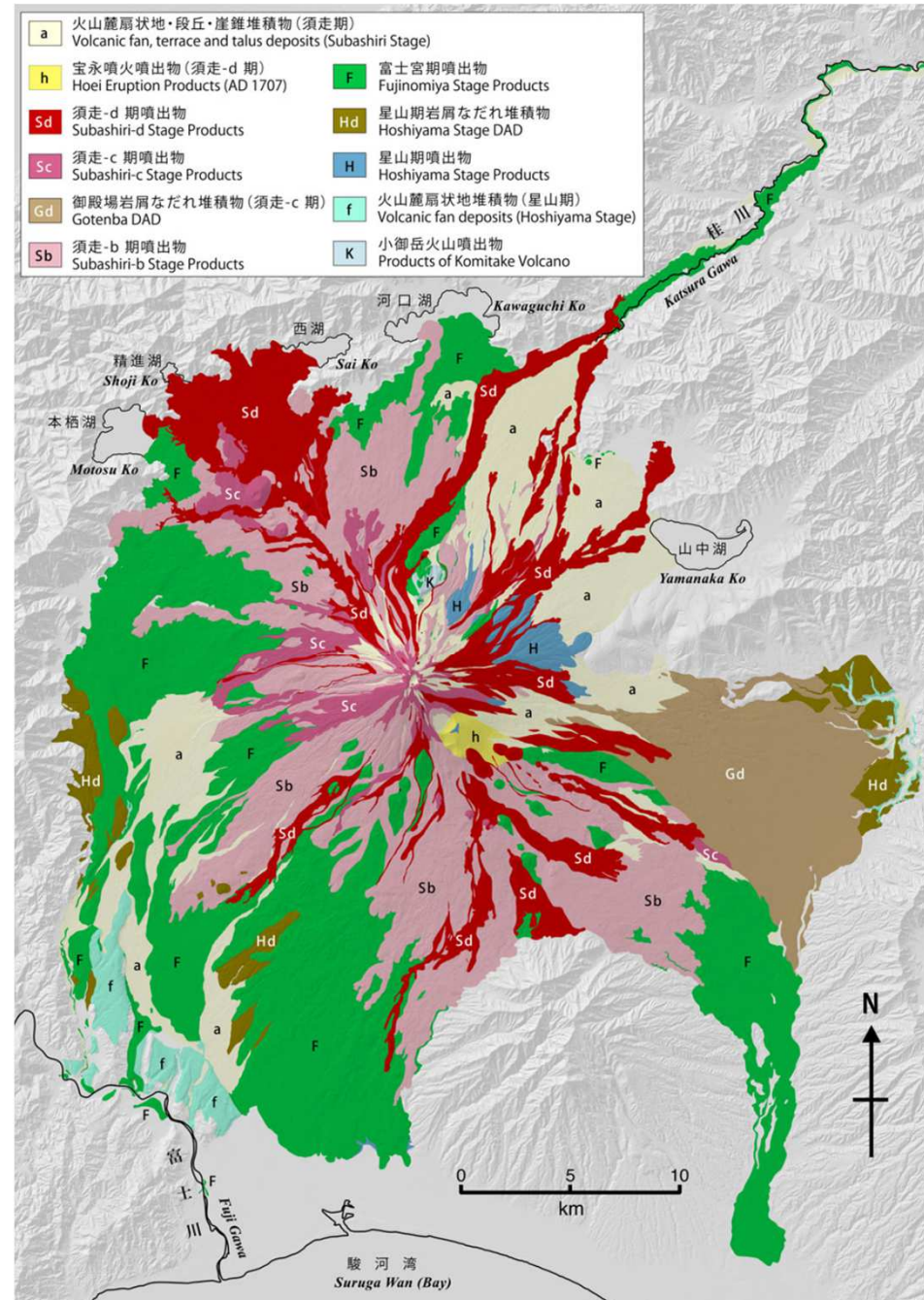


【付録】

付録1 富士山の地質概略図



富士山の地質概略図(富士火山地質図(第2版)説明書より)

付録2 富士山の噴火で生じる可能性が高い現象のイメージ図



富士山の噴火で生じる可能性が高い現象のイメージ図
(すべての現象が発生するとは限りません)

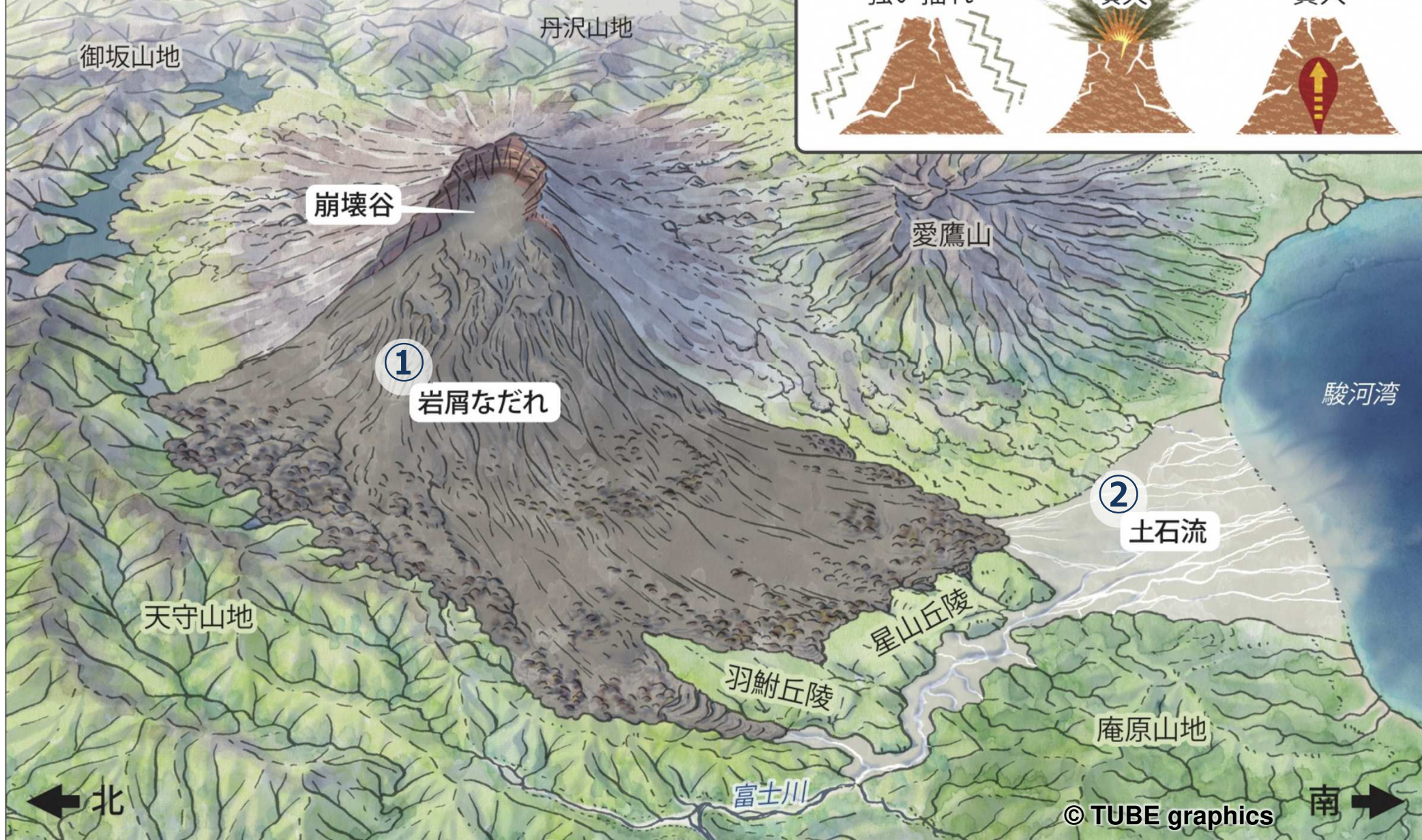
© TUBE graphics

※ 各火山現象の解説は「付録6」を参照。

画像提供：小山 真人 127

付録3 山体崩壊のイメージ図

約2万年前に起きた南西側への山体崩壊
(田貫湖岩屑なだれ)のイメージ図



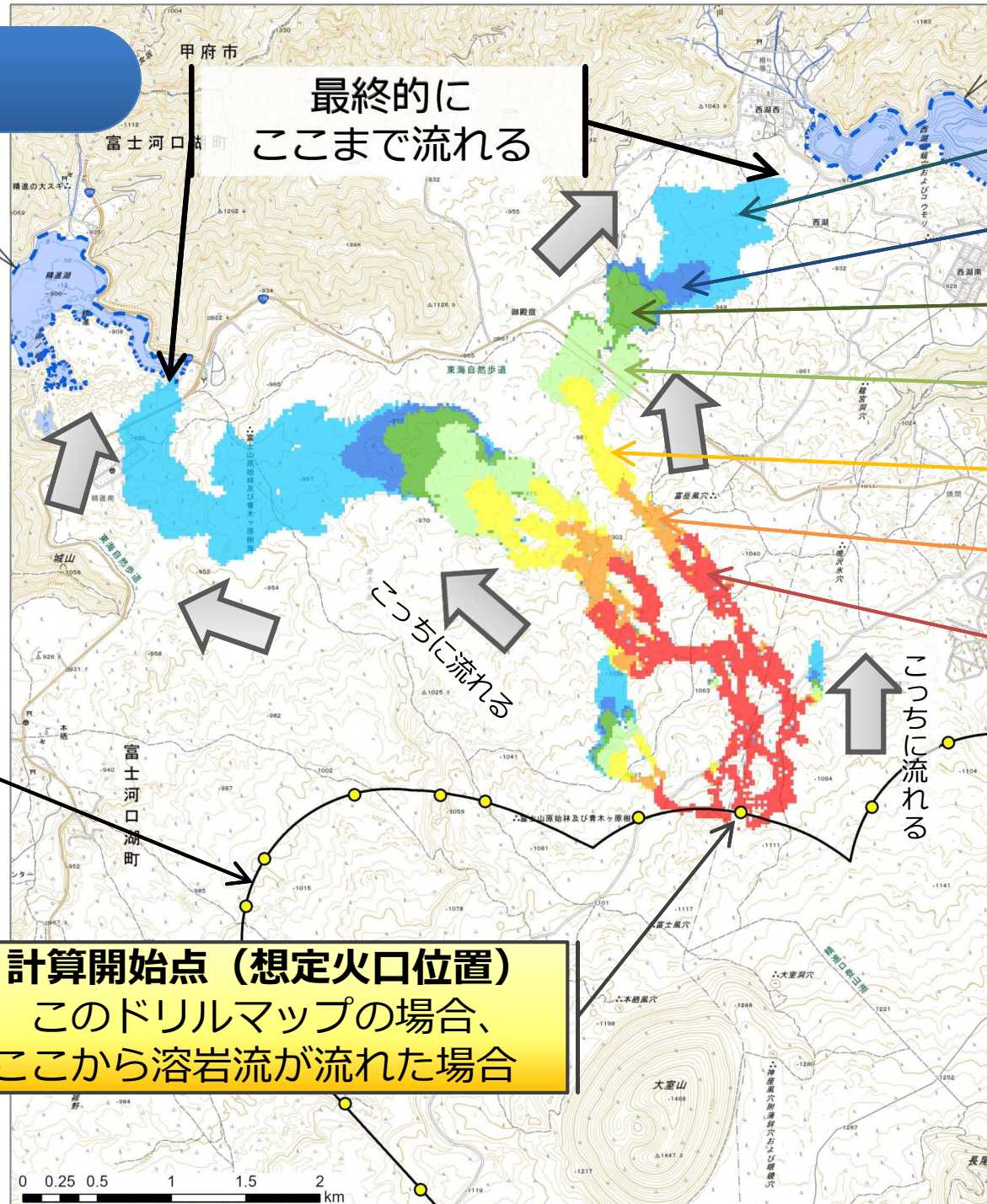
※ 各現象の解説は「付録6」を参照。

画像提供：小山 真人

ドリルマップ

※「ドリルマップ」の語句の解説は付録6を参照。

湖
(精進湖)



湖
(河口湖)

溶岩流が最終的に到達する可能性のある範囲

溶岩流が24時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が18時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が12時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が6時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が3時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が2時間で到達する可能性のある範囲

小規模噴火の可能性のある
想定火口範囲の外縁

計算開始点 (想定火口位置)
このドリルマップの場合、
ここから溶岩流が流れた場合

凡例

- 計算開始点 (想定火口位置)
- 想定火口範囲

到達時間

- 2時間で到達する可能性のある範囲
- 3時間で到達する可能性のある範囲
- 6時間で到達する可能性のある範囲
- 12時間で到達する可能性のある範囲
- 18時間で到達する可能性のある範囲
- 24時間で到達する可能性のある範囲
- 最終的に到達する可能性のある範囲 (最大で約6日)

可能性マップ

※ 「可能性マップ」の語句の解説は付録6を参照。

(注) 一度の噴火で、ここに塗られた範囲の全てに溶岩流の危険が生じるわけではない。

噴火する可能性のある範囲

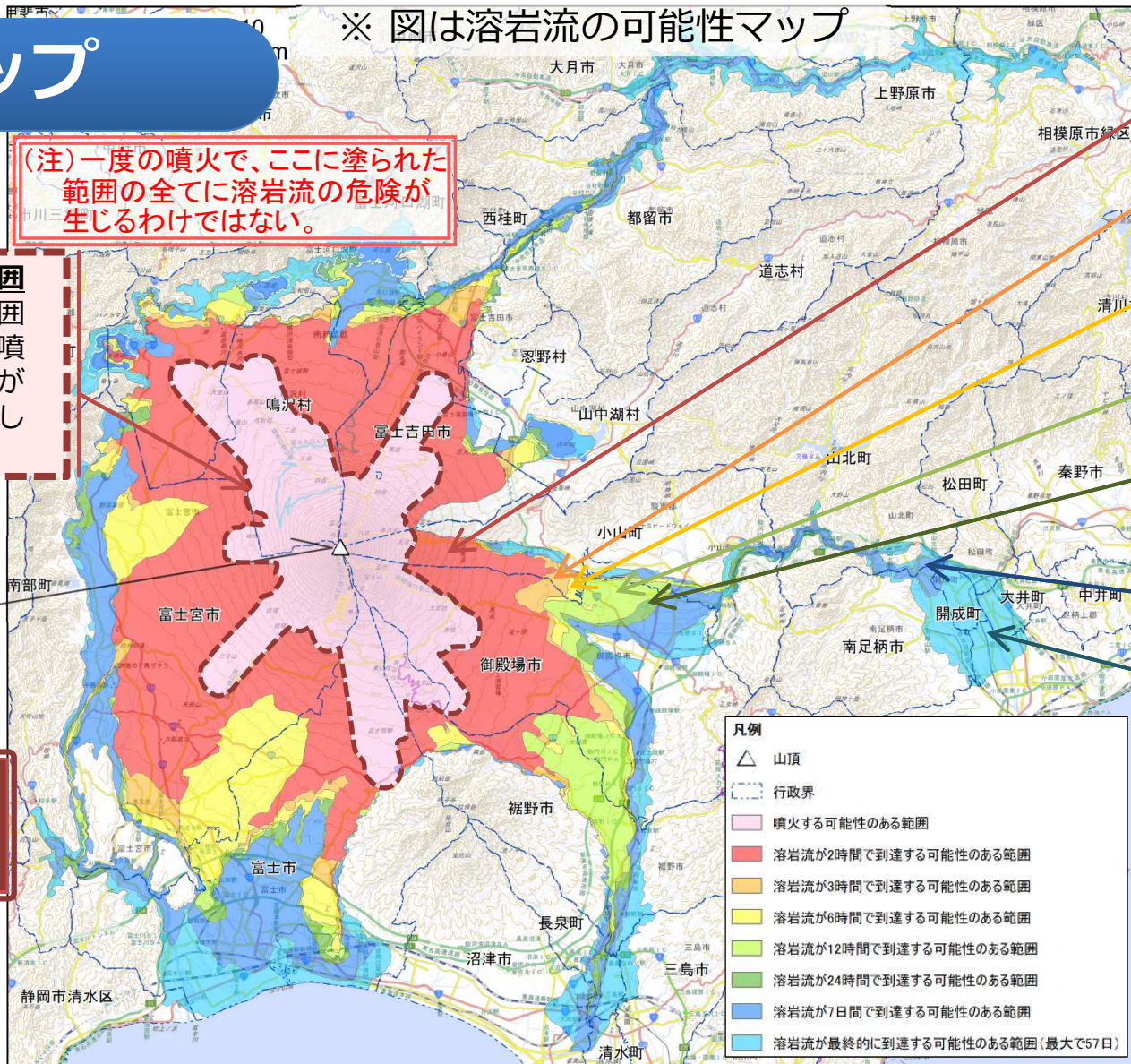
このマップは、この範囲内（破線内）のどこかで噴火が起きた時に、溶岩流が到達可能な最大範囲を示している。

富士山山頂

Check

必ずしも山頂から噴火するとは限らない。

※ 図は溶岩流の可能性マップ



溶岩流が2時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が3時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が6時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が12時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が24時間で到達する可能性のある範囲

溶岩流が7日で到達する可能性のある範囲

溶岩流が最終的に到達する可能性のある範囲

○ 富士山は噴火前に火口の位置が分からない。そのため、噴火する可能性のある範囲（想定火口範囲）から噴火し、溶岩流等の火山現象が流れ下った場合に、「可能性としてどこまで到達するか」を示したものが、**可能性マップ**である。

付録6 本報告書概要で使用する語句の意味 (1/2)

語句	意味	備考
か行		
火砕サージ	主に熱い空気や火山ガスなどの気体と、火山灰・小さな噴石などが混じって高速で広がる現象。一般に火砕流よりも温度が低く、流れの密度も希薄である。火砕流に伴って発生するものやマグマ水蒸気爆発によって発生するものなど発生原因は様々である。	
火砕流	火山灰や大小の噴石が高温の火山ガスや取り込んだ空気と一団となって時速数十～100km以上の速度で斜面を流下する現象。	現象のイメージ図は付録2の①参照
可能性マップ	溶岩流、火砕流、融雪型火山泥流などの火山現象が及びうる最大範囲や最小到達時間を網羅的に可能性領域として示したマップ。	図の見方は付録5を参照
岩屑なだれ	山体崩壊によって崩壊した土石が一団となって山腹を高速で流下する現象。	現象のイメージ図は付録3①参照
降灰	噴火によって火口から空中に噴出された火山灰が地表に降下する現象。(火山灰は直径2mm以下の破碎された岩片を指す。)	現象のイメージ図は付録2の②参照
さ行		
山体崩壊	高粘性マグマの貫入※1や爆発的な噴火※2、地震※3が原因により火山などの山体が大規模に崩壊すること。	現象のイメージ図は、 ※1 付録3(c)、 ※2 付録3(b)、 ※3 付録3(a)を参照

(五十音順)

付録6 本報告書概要で使用する語句の意味 (2/2)

語句	意味	備考
た行		
土石流	降雨などが引き金となって、土石と水が渾然一体となって時速数十kmの速度で流下する現象。	現象のイメージ図は付録2の③、付録3②参照
ドリルマップ	溶岩流、火砕流などの個々の火山現象を数値シミュレーションなどによって描いた分布図。噴火時の応急対策を検討する際の演習問題図という性格を有することから「ドリルマップ」と呼ぶ。	図の見方は付録4を参照
は行		
噴石	気象庁では、噴火によって火口から吹き飛ばされる防災上警戒・注意すべき大きさの岩石を噴石と呼んでおり、防災上の観点から「大きな噴石」および「小さな噴石」に区分している。概ね20～30cm以上の、風の影響をほとんど受けず弾道を描いて飛散するものを「大きな噴石」という。	現象のイメージ図は付録2の④参照
や行		
融雪型火山泥流	山腹につもった雪が火砕流などの熱で溶けて、斜面の土石を取り込んで時速数十kmの速度で流下する現象。	現象のイメージ図は付録2の⑤参照
溶岩流	火口から流出した溶岩が地表を流れ下る現象。(溶岩の性質によって流れる速さや厚さは大きく変化する。)	現象のイメージ図は付録2の⑥参照